

令和六年度鳥取県立図書館特別資料展

「平安時代の物語文学——読み継がれた源氏物語と池田亀鑑——」展 (2024.8.24～9.29)

郷土文化講演会 (令和六年 (二〇二四) 九月十申 (申)～十一月三十日 (土))

於 鳥取県立図書館

平安文学の人物像について——史実に相照らして——

流通経済大学 高橋由記

◆『枕草子』『源氏物語』が書かれた一条朝

今回、関連する文学作品、史料、人物

▼文学作品

『枕草子』(清少納言)

『紫式部日記』(紫式部)

『栄花物語』(赤染衛門?) ↑今回、展示あり

『大鏡』↑今回、展示あり 他

▼古記録

『小右記(しょうゆうき)』(藤原実資の日記)

『御堂関白記(みどうかんぱくき)』(藤原道長の日記)

『権記(ごんき)』(権大納言(ごん)だいなごん)藤原行成(九七二～一〇二七年、56

歳)の日記)

▼人物

清少納言(九六六年?～没年未詳)

紫式部(九七〇年以降～一〇一九以降) \*紫式部の生年には諸説あり。

藤原定子(九七七～一〇〇〇年、24歳)

藤原伊周(これちか)(九七四～一〇一〇年、37歳)

藤原道長(九六六～一〇二七年、62歳)

藤原彰子(九八八～一〇七四年、87歳)

藤原実資(さねすけ)(九五七～一〇四六年、90歳)

●清少納言(本名不明)

九六六年(康保二)?～没年未詳

清原元輔(九〇八～九九〇)の娘。「清/少納言」の「清」は、名字から。

父の元輔(『百人一首』四十二番歌「契りきなかたみに袖をしぼりつつ 末の松山浪

越さじとは」の作者)、曾祖父の深養父(『百人一首』三十六番歌「夏の夜は まだ

宵ながら 明けぬるを 雲のいづくに 月宿るらむ」の作者)は有名な歌人。

十代で、橘則光と結婚し一男を生むが離婚し、九九三年(正暦四)冬(二十八歳?)に、

中宮定子のもとに出仕。

●紫式部 (本名不明)

九七〇年 (天禄元) 以降〜一〇一九年 (寛仁三) 以降没  
 藤原為時 (九四九?〜一〇二九?) の娘。  
 九九八年ころ (二十代後半)、年の離れた藤原宣孝 (?〜一〇〇一) と結婚。娘賢子 (のちの、大式三位) を生む。宣孝没後に『源氏物語』を書き始めたか。  
 一〇〇五年 (寛弘二) (一〇〇六年説もある) 十二月二十九日、中宮彰子のもとに出仕。

◆一条朝という時代

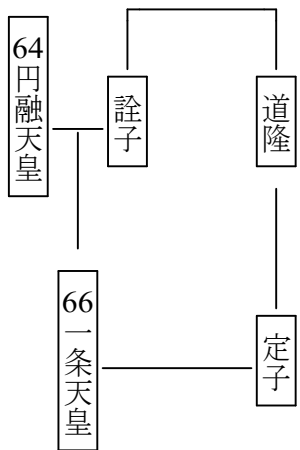
●一条天皇 (六十六代天皇)

九八〇年 (天元三) 〜一〇二一年 (寛弘八)、32歳。

在位は九八六年 (寛和二) 〜一〇二一年。

父は、六十四代円融天皇 (九五九〜九九一年、33歳)。

母は、藤原詮子 (東三条院) (九六二〜一〇〇一年、40歳)。



●一条天皇のキサキ…父の官職は、最終官

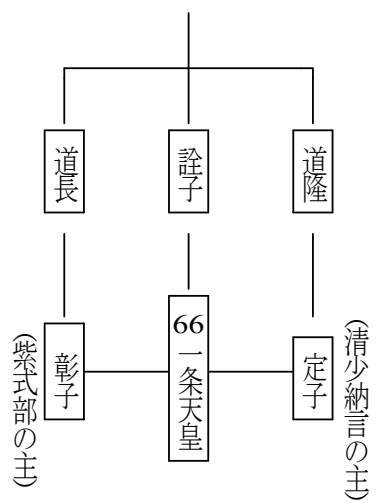
皇后 藤原定子 (九七七〜一〇〇〇年、24歳) …関白道隆女

中宮 藤原彰子 (九八八〜一〇七四年、87歳) …撰政太政大臣道長女

女御 藤原義子 (九七四〜一〇五三年、80歳) …太政大臣公季女

女御 藤原元子 (?)…左大臣顕光女

女御 藤原尊子 (九八四〜一〇二二年、39歳) …関白道兼女



## ◆略年表

西暦 (和暦)	事項
九六六年 (康保三)	道長、生。
九七〇年 (天禄元)	清少納言、生か。
九七七年 (貞元二)	紫式部、生か。
九八〇年 (天元三)	定子、生。
九八六年 (寛和二)	一条天皇、生。
九八八年 (永延二)	一条天皇 (7歳)、即位。
九八〇年 (正暦元)	道長娘の彰子、生。
九九〇年 (正暦四)	定子 (14歳)、一条天皇 (11歳) のもとに入内。 定子、中宮になる。
九九三年 (長徳二)	冬 清少納言 (28歳)、定子 (17歳) のもとに出仕か。
九九五年 (長徳元)	4月 道隆 (43歳。定子の父) 没。 (伊周22歳と道長30歳の政権争いの結果) 道長が右大臣になる。
九九六年 (長徳二)	伊周 (23歳)、隆家 (18歳) Ⅱ 定子の兄弟、左遷。 定子 (20歳)、自ら髪を切る。
九九七年 (長徳三)	10月 高階貴子 (40歳くらい。定子の母) 没 12月 定子、脩子内親王を生む。
九九八年 (長徳四)	この年、紫式部は父藤原為時に従って、越前国に下る。 伊周・隆家、罪を赦されて帰洛。
九九九年 (長保元)	この年、紫式部は藤原宣孝と結婚か。
一〇〇〇年 (長保二)	11月 道長娘の彰子 (12歳)、一条天皇 (20歳) のもとに入内。 定子 (23歳)、敦康親王を生む。 この年、紫式部は娘の賢子を生むか。
一〇〇一年 (長保三)	2月 彰子 (13歳)、中宮になる。定子 (24歳) は皇后に。 12月 定子、嬪子内親王を生み、翌日薨。 清少納言は宮仕えを退くか。
一〇〇五年 (寛弘二)	紫式部の夫藤原宣孝没。この後、紫式部は『源氏物語』執筆か。
一〇〇八年 (寛弘五)	12月 紫式部 (30代半ば)、彰子 (18歳) のもとに出仕。
一〇〇九年 (寛弘六)	9月 彰子 (21歳)、敦成親王 (のちの後一条天皇) を生む。
一〇一〇年 (寛弘七)	11月 公任が紫式部に話しかける (Ⅱ 『源氏物語』が確認できる 初例)
一〇一〇年 (寛弘七)	11月 彰子 (22歳)、敦良親王 (のちの後朱雀天皇) を生む。
一〇一〇年 (寛弘七)	藤原伊周 (37歳) 没。
一〇一一年 (寛弘八)	一条天皇 (32歳) 崩。
一〇一六年 (長和五)	三条天皇 (36歳) 即位。 彰子の生んだ後一条天皇 (9歳) 即位。

◆紫式部と『源氏物語』

紫式部には、三文学作品が残っている。(三作品は珍しい)

- ・『紫式部日記』 ↑一〇〇八年(寛弘五) 九月の中宮彰子の出産についての記事など。日記文学作品。紫式部が、『源氏物語』作者であろうことが記される。
- ・『紫式部集』 ↑紫式部に関わる和歌の集
- ・『源氏物語』 ↑作り物語

◆『紫式部日記』

●一〇〇八年(寛弘五)十一月一日(≡彰子所生の敦成(あつひら)親王五十日の祝)紫式部、公任(当時、中納言兼左衛門督。43歳)に話しかけられる。

▼原文

左衛門督、「あなかしこ、このわたりに、若紫やさぶらふ」と、うかがひたまふ。源氏に似るべき人も見えたまはぬに、かの上は、まいていかでものしたまはむと、聞きゐたり。(P165)

▼現代語訳

左衛門督(≡公任)様が「失礼ですが、このあたりに、若紫はおいでですか？」と几帳の間からおのぞきになる。源氏の君に似ている方もお見えにならないのに、まして紫の上がどうしてここにいらっしゃるのでしょうかと、私は聞いていた。

●一〇〇九年(寛弘六)の出来事か？ 一条天皇が、紫式部の才を褒める。

▼原文

内裏(うち)の上(≡一条天皇)の、源氏の物語人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才(ぎえ)あるべし」と、のたまはせけるを、(P208)

▼現代語訳

一条天皇が、『源氏物語』を人に読ませなさってお聞きになっていたときに、この人(≡紫式部)は日本紀を読んでいるようだね。本当に学識があるらしい」と仰ったのを、



◆清少納言と紫式部

清少納言と紫式部は、ライバルと言われることがある。

- ・ 出仕先（清少納言の出仕先は、皇后定子／紫式部の出仕先は、中宮彰子）\*系図参照
- ↓ただし、清少納言が宮仕えを退いた後に、紫式部は出仕したので、清少納言と紫式部の二人が直接会ったことはない。

●『紫式部日記』にみる、清少納言評

▼原文

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかり賢（さか）しだち、真名書き散らしてはべるほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。かく、人に異ならむと思ひ好める人は、必ず見劣りし、行末うたてのみはべれば、艶になりぬる人は、いとすごうすずるなるをりも、ものあはれにすすみ、をかしきことも見過ぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるにはべるべし。そのあたになりぬる人の果て、いかでかは良くはべらむ。(P202)

▼現代語訳

清少納言は実に得意顔をして偉そうにしていた人です。あれほど利口ぶって漢字を書きちらしております程度も、よく見ればまだ足りない点がたくさんあります。このように人より特別に勝れようと思ひ、またそう振る舞いたがる人は、きつと後には見劣りがし、ゆくゆくは悪くなつてゆくものですから、いつも風流ぶつていてそれが身についてしまった人は、寂しくつまらないときでも、しみじみと感動しているように振る舞い、興あることも見逃さないようにしているうちに、自然とよくない浮薄な態度にもなるのでしよう。そういう浮薄になつてしまった人の行く末が、どうしてよいことがあります。

◆『枕草子』

・ 清少納言

・ 日本三大随筆のひとつ

・ 「春はあけぼの」



\*『枕草子』は、章段（しょうだん）と呼ばれる、小さな区切りの集まり。『枕草子』には約三百の章段がある。

\*『枕草子』の章段数は、注釈書（出版社）によって多少異なる。そのため、『枕草子』は章段数だけではなく、章段の冒頭と、どの注釈書に依ったのかを記す必要がある。

『枕草子』の内容は三種類に分けられる。

- 1、類聚的章段——「……は」「……もの」
- 2、日記的章段——清少納言の見聞したことを記したもの。実在人物が多く登場。
- 3、随想的章段——「1」「2」以外の章段

◆『枕草子』に記される中宮定子と伊周

\* 定子は、一〇〇〇年（長保二）二月に中宮から皇后となった（彰子が、新たに中宮に立ったため）。それ以前は中宮。

●一七七段「宮にはじめてまゐりたるころ」

\* 九九三年（正暦四）冬のことか？（定子17歳、伊周20歳、清少納言28歳？）

▼原文

宮にはじめてまゐりたるころ、物のはづかしき事の数知らず、涙も落ちぬべければ、…いと冷たきころなれば、さし出でさせたまへる御手のはつかに見ゆるが、いみじう匂ひたる薄紅梅なるは、限りなくめでたしと、…「かかる人こそは、世におはしませければ」と、驚ろかるるまでぞ目守（まも）らする。…

大納言殿（伊周）のまゐりたまへるなりけり。御直衣、指貫の紫の色、雪に映えていみじうをかし。柱もとにゐたまひて、

（伊周）「昨日今日、物忌に侍りつれど、雪のいたく降りはべりつれば、覚束なさになむ」と申したまふ。

（定子）『道もなし』と思ひつるにいかで」とぞ御答（いら）へある。うち笑ひたまひて、

（伊周）『あはれと』もや御覧するとして「などのたまふ御有様ども、これより何事かはまさらむ。物語にいみじう口にまかせて言ひたるに、違（たが）はざめりとおほゆ。（P306）

▼現代語訳

「私、清少納言が」中宮定子様のところに初めて参上した頃、恥ずかしいことが数多くあつて、涙も落ちてしまいそうなので…とても冷たい頃だったので、袖から出ていらつしやる「定子様の」御手がすこし見えるのだが、とても美しい薄紅梅色なのは、本当にすばらしいと、…「こんな方が、この世にいらつしやるなんて」と、驚くほど見つめてしまった。…

「関白殿道隆様ではなく」大納言伊周様がいらつしやつたのだった。「伊周様の」御直衣や指貫の紫の色が、雪に映えてとてもすばらしい。「伊周様は」柱のわきにお座りになつて、

（伊周）「昨日と今日は、私は物忌でございましたが、雪がとても降っておりますので、宮様がどうしておいでのかと、気がかりで、ここに参りました」と仰る。

（定子）「まあ、『雪が降り積もつて』道もない』と思つておりましたのに、どうして」と「定子様が」御返答なさる。すると、「伊周様は」お笑いになつて、

（伊周）「宮様が『今日訪ねてきた私を』殊勝な者だと』お思いくださるのではないかとと思ひまして。」などと仰るお二人の御様子は、これ以上のものがあるうか。

物語で口から出放題だつたと思つていたことと一緒だわ、と「私は」思つた。

↓ 定子と伊周の会話のもとなつてゐるのが、次の、平兼盛の和歌。

◎ 山里は 雪降り積みて 道もなし、今日来む人を あはれとは見む（拾遺集・冬・二五一）

◆古記録にみる、貴族社会の定子への批判

●『小右記(しようゆうき)』(小野宮右大臣(おののみや うだいじん)藤原実資)の日記。道長に批判的な記述が多いことで知られる。

1、九九〇年(正暦元)九月三十日条(同年十月五日に、定子が立后) 右頭中将(伊周)、以言を使はし、立后の時の儀式の日記を借る。……「来月五日、其の事有るべし」と云々。皇后四人の例、往古聞かざる事なり。↓それまで、「后」は三人(太皇太后、皇太后、皇后)までだったが、定子は前例を破つての、四人目の后。

\*当時、「皇后」の別称として使われていた「中宮」を、「皇后」とは別とみなした。

2、九九六年(長徳二)五月二日条(前日、在所を搜索される。定子が髪を切る)

后の奉為(おんため)、限り無き大恥なり。又、云はく、「后(定子) 昨日出家し給ふ」と云々。事、頗る実に似る」てへり。

3、九九七年(長徳三)六月二十二日条(出家後の定子、職の御曹司に入る)

今夜中宮(定子) 職曹司に参り給ふ。天下甘心せず。「彼の宮の人々、出家し給はざるを称す」と云々。太だ希有の事なり。外記、行啓に属従すべき由を申さしむ。然れども候ぜず。行啓の事、戸部、承り行なふ。

4、九九九年(長保元)八月九日(定子、出産のために、平生昌邸に出御)

「今日、中宮里第に出御すべし。而るに上卿無し。只今、行啓に供奉する所司を召し仰すべし」てへり。「左府、払暁、人々を引率し、宇治の家(六条左府の後家の手より買領せる処なり。)に向かふ。今夜、彼の家に渡るべし」と云々。行啓の事を妨ぐるに似る。上達部、憚る所有りて、内に参らざるか。

↓皇后が、出産のために出御したが、同日、道長が宇治に出かけてしまい、多くの公卿は道長に従った。

●『御堂関白記』(藤原道長の日記)

九九九年(長保元)十一月一日、道長女彰子(12歳)入内。

十一月七日、彰子女御になる。同日、定子(23歳)第一皇子敦康親王 出産。

一〇〇〇年(長保二)二月十日、彰子里第に下がる(立后のため)

二月十一日、定子が内裏に入る。↑彰子退下の翌日、定子参内

5、一〇〇〇年(長保二)二月十一日条

東河に出でて神馬を出立す。伊祐朝臣を以て使と為す。……又、中宮、内に参り給ふ。神事の日、如何。事、毎と相違す。

↓出家した定子が、神事の日之内裏に入ることは、いかななものだろうか。

◆歴史物語(栄花物語)にみる定子、道長

『栄花物語』(正編三十巻は、赤染衛門が編集関与か) 藤原道長の栄華を編年体で描く歴史物語。全四十巻。

●定子の「あはれ」(多数)

①、(父道隆没後、一条天皇のところに、新たに、二人の女御が入内して)

中宮は、年ごろかかることやありつる、故殿の一所おはせぬ故にこそあめれと、あはれにのみ思さる。内には、人見るをりぞといふやうに、今めかしう、何ごとにつけても中宮をつねに恋しう思ひきこえさせたまへり。(巻四「みはてぬゆめ」①P228)

▼現代語訳

中宮(≡定子)は、これまでこんなこと(≡他の女性の入内)があつただろうか、故殿(≡道隆)お一人がいらっしゃらないからだろうと、悲しく思われる。帝(≡一条天皇)は、人目が多くなつたものの、何につけても中宮(≡定子)をつねに恋しいとお思い申し上げていらつしやる。

②、(伊周隆家兄弟による、花山院放射事件が起き、処罰もまもなくという噂が立つ。定子は、第一子懐妊中)

(定子)「さやうの夢をも見ば、我いかにせむ、いかでただ今日明日身を失ふわざもがな」と、思し嘆けど、(巻五「浦々の別」①P237)

▼現代語訳

(定子)「そのような悪夢(≡兄弟が処罰されるようなこと)を見ることになつたならば、私はどうしたよいだろう。ただもう、「そのような悪夢を見る前に」今日明日にでも命を失う方法があればいいのに」と、お嘆きになるが、

③、(伊周隆家兄弟が処罰されて、定子が髪を切る)

宮(≡定子)は御缺して御手づから尼にならせたまひぬ。内(≡一条天皇)には、「この人々まかりぬ。宮は尼にならせたまひぬ」と奏すれば、「あはれ、宮はただにもおはしまさざらむに、ものをかく思はせてまつること」と、思し続けて、涙こぼれさせたまへば、忍びさせたまふ。(巻五「浦々の別」①P250)

▼現代語訳

中宮(≡定子)は缺を取つて、ご自身で尼におなりになつてしまつた。帝(≡一条天皇)に対して、「報告者が」「罪人(≡定子の兄弟の伊周と隆家)は配所に出発しました。中宮様は尼になられました。」と申し上げると、「一条天皇は」「ああ、中宮は普通の身ではない(≡懐妊中)のに、このように物思いをさせ申すことだ」と、お思い続けて、涙がこぼれていらつしやるので、お隠しになる。



●道長の卓越性(多数)

①、(一条朝になり、兼家が摂政に。道隆、道兼に続いて) 若い頃の道長の様子

五郎君(＝道長)、三位中将にて、御かたちよりはじめ、御心ざまなど、兄君たちをいかに見たてまつり思すにかあらん、ひきたがへ、さまざまいみじうらうらうじう雄々しう、道心もおはし、わが御方に心よせある人などを、心ことに思し顧み、はぐくませたまへり。御心ざますべてなべてならず、あべきかぎりの御心ざまなり。后宮(＝詮子)も、とりわき思ひきこえたまひて、わが御子と聞えたまひて、心ことに何ごとも思ひきこえさせたまへり。ただ今御年二十ばかりにおはするに、たはぶれにあだあだしき御心なし。それは御心のみめやかなるにもあらねど、人に恨みられじ、女につらしと思はれんやうに心苦しかべいことこそなけれなど思して、おぼろけに思す人にぞ、いみじう忍びてものなどのたまひける。かうやんごとなき御心さまを、おのづから世に漏り聞えて、「われもわれも」と気色だちきこゆる所どころあれど、「今しばし、思ふ心あり」とて、さらに聞き入れたまはねば、(巻三「さまさまのよろこび」P145)

▼現代語訳

〔摂政兼家の〕五男(＝道長)は、三位中将で、御容貌をはじめとして、御気性なども、兄君(＝道隆、道兼)をどのように見ていらっしやるのか、異なっていて、何事も巧者で男らしく、道心もありで、ご自身に好意を持つ人を、目を掛け庇護なさった。お人柄もすばらしい。后宮(＝姉の皇后詮子)も、「道長を」特別に目を掛けて、自身の御子と申し上げて、特別に思っいらっしやる。「道長は」今は二十歳くらいで、冗談にも浮気っぽいところはない。謹直というわけではないが、人に恨まれまい、女性に薄情だと思われることがつらいとお思いになって、特別な女性に対して、人目に立たないように情けをかけていらっしやる。このようなすばらしいお人柄なので、自然と世間の評判となつて、「我が家の婿に」と意向を漏らすところは方々にあるけれど、(道長)「もう少し待つてほしい。考えていることがあるのだ」といって、「縁談を」聞き入れないので、

②、道長の位も浅く、兄たち(道隆、道兼)も健在だったところから、世間の人は、道長のことを格別な人だと噂している。(巻三「さまさまのよろこび」P164)

③、(定子が、第一皇女脩子内親王とともに参内するに際して)

かくて「定子が」内裏に参らせたまふ夜は、大殿(＝道長)、さるべき御前参るべきよし仰せらるれば、みな参りたり。殿(＝道長)の御心さまのいみじうありがたくおはしますことかぎりなし。(巻五「浦々の別」①P277)

↓『小右記』九九七年六月二十二日条(前掲 3)によると、「天下、甘心せず」だった。

④、(彰子が立后のために里に下がる。定子が参内)

かかるほどに、内裏わたりつれづれに思われて、「このひまにいかでか一の宮(＝敦康親王)見たてまつらむ」と思しめせど、よろづつつましうて、えのたまはせぬに、殿(＝道長)、「このごろこそ一の御子見たてまつらせたまはめ」と奏させたまへば、「一条天皇は」いとうれしく思し召されて、……二月つごもりに「定子は」参らせたまふ。御輿などもことごとしければ、一の宮(＝敦康親王)参らせたまふ御迎へにとて、大殿(＝道長)の唐の御車をぞ率てまゐれる、それに宮(＝定子)も姫君(＝脩子内親王)やもがて奉れる。……殿の御心ざまあさましきまでありがたくおはしますを、世にめでたきことに申すべし。帥殿(＝伊周)も、わが御心のいかなればにか、「いと思はずなりける殿の御心かな。女御(＝彰子)参りたまひて後は、よもとこそ思ひきこえつるに、一の宮の御迎への有様などぞ、まことにありがたかりける御心なりけり。われらはしもえかくはあらかし」とぞ、内々には聞えたまひける。(巻六「かがやく藤壺」P308)

▼現代語訳

この間(＝彰子退出の間)、一条天皇は所在なくお思いになって、「この機会に、どうかして一の宮(＝敦康親王)に会いたい」とお思いになるけれど、何事も遠慮なされて、仰ることができないでいると、殿(＝道長)は「この機会に、一の宮(＝敦康親王)にお会いになればよろしいかと」と奏上するので、「一条天皇は」とても嬉しくお思いになり……二月末に「定子は」参内した。御輿も大袈裟なので、一の宮のお迎えということで大殿(＝道長)が遣わした唐庇の御車で、それに中宮定子も、姫宮(＝脩子内親王)もお乗りになる。……殿(＝道長)の配慮は滅多にないことを、世間では褒めるに違いない。帥殿(＝伊周)も、ご自身としてはどうであろうか、「本当に思いもよらない殿(＝道長)のお心だ。女御(＝彰子)が入内した後は、まさか、こんなお心配りはないと思っていたのに、一の宮のお迎えの有様など、本当に滅多にないご配慮だ。私だったら、とてもこんなことはできない」と、内々には申し上げなされた。

↓道長が、定子の参内を「神事の日、如何」と書いたことは有名『御堂関白記』(一〇〇〇年二月十一日。前掲 5)。この描写は、史実と異なる。

『紫式部日記』『枕草子』『栄花物語』は、小学館新編日本古典文学全集により、私に表記等を改めた。『小右記』『御堂関白記』の読み下しは、国際日本文化研究センター「撰関期古記録データベース」(<https://www.nichibun.ac.jp/ja/db/category/heian-diaries/>)による。

